「都立中央図書館の在り方を考える有識者会議（第 1 回）」 議事録

日 時：2023（令和５）年 7 月 27 日（木） 13 時 00 分～14 時 00 分

場 所：オンライン開催

出席者：吉見座長、浅川委員、木村委員、田中元子委員、田中里沙委員

議事概要

・意見交換（これからの図書館を考える視点について）

（浅川委員）

〇最先端の科学技術、図書のデジタル化によって、図書館の利用方法がリアルとサイバーワールドの二つに分かれてくると思う。「なぜ図書館という物理的な場所が必要になるのか」ということが、今後、非常に重要なポイントになる。どのような新たな図書館エクスペリエンスができるのか、世界の事例等も踏まえながら、議論させていただきたい。

〇reading disability について、障害者に対する支援というものが、実は一般の方にも役に立つというところのシナリオを議論されるのが重要。高齢化とともに読書をする機会も少なくなってくると言われる中、そういった方々にも広くこの reading disability への支援技術を紹介して、広く読書、図書というものを知ってもらうということも、多様性の中で考えていくことが重要。

〇「東京の図書館の意義」として、外国語対応が挙げられる。テクノロジーを使うことによって、言語のギャップが、今後なくなってくる。対応する言語は英語や中国語等、主要な 3 か国語、多くても 5 か国語ということになりがちであるが、海外からの観光客など様々な方が世界からくる中、東京の図書館としては、テクノロジーを利用してあらゆる言語に対応したサービスを提供して行くことが非常に重要。

〇サイバーワールドにどうアクセスするかということを学ぶ場所として、図書館という物理的な場所も重要。リアル(オンサイト)で人と人が直接会って学ぶサービスの提供は非常に重要。

〇北欧など、アクセシビリティも考慮された建物等も調査していただきたい。例えば段差をなくすとかエレベーターを作るとか、建物の物理的なアクセシビリティだけではなくて、ロボット技術やセンサー技術、AI 技術を導入してスマートビルディングと言ったところにも広げて考えていただくと、非常に面白い次世代の図書館になっていくのではないか。

（木村委員）

〇どこからでもアクセスできるようにするということは、すなわちその書籍のデータ、書籍そのものの情報がどんどん電子化していくことになる。そうすると恐らく全ていろんなことがデータになっていくので、フィジカルな図書館の意味を、分けて考えないといけない。

〇一方で観光という話となると、逆にフィジカルに「そこに行くことに意味がある」と言うことになるので、例えば「建物自体の魅力」や「そこに行ったこと自体の魅力」など、そこに行くこと自体が面白い、そこで出会うことが面白い、そこで何か体験することが面白いというような、そこに行くこと自体に意味があるということが、今後より実世界の方には求められていくのではないか。そういう観点からも、結局、この図書館に誰が何をしにくるのかというところを明確にしておいた方が、明確なビジョンが立てられるのではないか。

〇例えば、専門の方々がこの図書館にしかない書籍や資料を見にくるということが今まで多かったのではないかと思われるが、そこをより広い、例えば子供や学生も見に来るという風にするのであれば、その人たちは何を求めてくるのか、例えば資料を見に来るのか、単に休憩をしに来るのか、建物見にくるのか、子供用の書籍があるのか等、そのような具体的な、誰が何をするというところを明確にして行く必要があるのではないか。

〇この図書館の特徴である「自然」と「豊富な資料」、例えば東京都、江戸に関する資料が充実していることにクローズアップするのであれば、そこに注目するような体験や施設の特徴を考える必要があるし、何か新たな軸をもう一つ設けるのであれば、図書館のどういうところに設けるのかを考える必要がある。

〇デジタルと時に、DX の方法はいろいろある。書籍を電子書籍として持っていくこと、音声データまで持っていくこと、それともそれを本当に体験できるように、例えばＶＲ空間のようなところにもってくることもできるかも知れない。または AI を活用し、なんとなくこんな本が読みたいということで検索してくるという切り口もあるかも知れない。そのあたりもやはりどういう体験をするか、どういうふうに利用してもらいたいかに依存するため、そこをもう少し具体化して行くといいかなと思います。

（田中元子委員）

〇東京や日本が今抱えている課題は、先進的な課題とも言える。これから他の国々が直面する

ような課題に、一足先に向き合っていくことになっていると思われる。東京都民、日本の皆さん、若い方が社会や未来に対する不安感をもたれていると言われているが、そういったことに対して前向きに向き合える知性がここにあるということは、希望につながる。

○本当にいい建築物を作って欲しい。アクセシビリティもしかり、チャレンジングなアイディアが少し丸め込まれて、保守的になって行くようなことがないよう、みんなが晴れやかな気持ちになるような建築がまず欲しい。

〇先ほど申し上げた課題というものを、可能性とか知性に変えて、都民、日本の皆さんに触れ合っていただく、海外の方々に「こんな触れ合い方があるんだ」「知性との出会い方って、こんなにユニークなことを東京はしているんだ」って気づいてもらう場にできると良いのではないか。情報の質の高さ、情報量の多さ、意外な触れ合わせ方等、これまで情報にアクセスできなかった方、障がいのある方達だけでなくて、様々な意味で機会のなかった方々にも気軽に触れ合える伝え方、情報との接し方のようなものがあると、ここにフィジカルの図書館がある意義があるのではないか。知性との触れ合い方、そういった日常というものが観光資源にもつながるのではないか。

○「ここに来たらドンズバで東京のことがわかる」という東京博物館のようなものがあるとありがたい。江戸時代だけでも、未来だけでもなくて、東京のカルチャーとか、暮らしがひと繋がりに手に取るようにわかるような場所。観光客の皆さんが、まっさきに行きたい場所になると良いのではないか。

〇また、山積する課題を通しながら、世界的な課題として、「人間って何だろう？」っていうことが裏テーマにあると良いのではないか。人間について考え続けることが、科学技術の価値とか、意味に対してもすごく理解が深まる。「人間のあり方」みたいなものが、裏テーマにあると良い。

（田中里沙委員）

〇人生百年時代、recurrent 時代の今、誰もが多彩な知に触れて学んで、また教えたり伝えたりするという立場になり、多くの人が知識のリーダーになり得るという事の認識を持つ必要がある。図書館が拠点になって、そういう人がつながり増えていくと良いのではないか。

〇その結果、誰もが自分の可能性を広げる場、世界と繋がる場と言うことで、図書館を認識してもらえると良いのではないか。

〇過去からの知恵の集積が図書館にあるが、今現在の東京や日本のことがわかる場所が無い。どこか 1 カ所でというのは難しい。「重点的な情報」からはトレンドも見えるし、大使館との繋がり

という説明もあったが、いろんなインバウンド、海外との繋がりもあって、海外の人が来たら、まずこの図書館にくるという流れも作れるだろう。観光客が東京に来た時に、図書館がまず最初のガイド、ホテルのコンシェルジュ機能のようになる、というようなことがあるといいのではないか。

〇個人で図書館を使う以外にＢtoB 的な機能もあり、企業や団体への貢献もあるようなので、一度棚卸して、メニュー化して精緻に見ることができると、アイディアも広がるのではないか。

〇次世代のデジタル技術やツールも活用して、フィジカルとサイバーをミックスするような体感のメニューもあるのではないか。ここを今後充実させていくことが有効なのではないか。

〇ハード面について、例えば近畿大学の事例では、大学生の図書館離れが酷いということで、図書館の中で、街の中から学問へいざなうように入って行く、という動線の設計がされている。今の都立中央図書館は、緑と本との間の中に入り込んで、自分自身で発見して行く楽しみはあると思うが、今後このような動線をあえて作っていくのか、あるいは発見型で行くのかとか、色々議論ができると良いのではないか。

（吉見委員）

〇有栖川宮公園の風景が素晴らしい。がま池など地形的にすごく面白い地域。これが港区から渋谷区にかけて広がっている。中央図書館ならではの場所。

〇サイバーワールドの図書館とリアルの図書館に加えて、もう１つの次元として、東京全体が図書館というか、図書館として、ライブラリーとしての東京というものも考えられるのではないか。

〇そうすると、この三つの図書館の関係をどういう風に設計して行くのか、そういう視点があってもいいのではないか。そしてそのときに、ではその図書館の利用者とは誰なのかということ、これはもっと詰めていく必要がある。これまでも都立図書館は、政策立案のための情報を提供してきたという説明があったが、その時の政策立案を提供する対象が都の職員となっていた。これからの東京の街を作る構想をしていく主体は、都の職員だけではなく、むしろひとりひとりの市民、東京あるいは１都３県に住む人々が、東京のまちを作る主体、この地域をどうして行くのかを構想する主体になって行かないといけない。そうだとすると、その三つの次元の図書館というものを、利用者は必ずしも享受者というだけではなくて、この東京の作り手になっていく。その媒介、メディアとしての図書館がいかにありえるのか、ぜひ話し合っていきたい。

〇これからの議論で四点ほど、議論して詰めていかなくてはならない点がある。１つ目はいうまでも

なくデジタル。デジタル空間としてこれからの都立図書館をどうつくっていくのかという決定的に重要な論点だが、既に国立国会図書館が、所蔵デジタルデータの個人への配信を始めており、国会図書館と都立図書館の役割はどう違うのかという区分けなども議論する必要が出てくる。

〇２つ目は、近畿大の図書館も、石川県立図書館もしかり、図書館が単に調べて読むだけの空間ではなく、カフェになったり、コモンズになったり、いろいろ多機能化して行く。そうすると、図書館の併せ持っていく機能の相互の関係が問題になってくる。どういう多機能化がいいのかという話になる。浅川委員のお話にあった「障害者支援で培ったノウハウを一般人々に広げていく在り方」も、当然ながら非常に重要なキーになってくる。

〇３つ目にグローバル。東京を外に見せていくということになると、都立図書館が一方にあって、他方には江戸東京博物館がある。グローバルに東京をどう見せていくかという点で、両者の関係が問題となり、ライブラリーとミュージアムがデジタル化の中で接近して行く中で役割分担や、お互いのコラボレーションというものも非常に重要になってくるのではないか。

〇最後、グリーン、nature について。都立中央図書館は、有栖川宮公園という素晴らしい場所に立地している。やはり東京の緑は東京の自然地形というかこう凸凹した谷間があって、その中に池があったり、思わぬところに木が生えたりしている。自然地形にかなり守られているところがあり、こういう東京の自然地形を生かして行く。動線の話にも直結するが、町と緑と図書館というものの、空間的な関係でその緑を守っていく施設として、図書館をどういう風に生かして行くのかというのも大きな課題になってくるのではないか。